

ザ・ストーリーオブ・東海道五十三対 国貞・国芳・広重

2026年9月19日(土)～11月3日(火/祝)

江戸の流行を鮮やかに彩る
歌川国貞奇抜な構図で目を引く
歌川国芳調和が織りなす風景美
歌川広重

浮世絵館だより

藤沢市
藤澤浮世絵館
2026年10月
WEB版

幕末の三大人気絵師!?

歌川国貞(1786-1865)

天明7年(1786)5月に本所五ツ目の渡し場を経営する亀田屋の九代目角田庄五郎(庄三)として生まれる。十代半ばに初代歌川豊国に入門し、早くからその才能を認められ、弘化元年(1844)には、師匠の名「豊国」を襲名する。門人たちと分業体制を確立させ、圧倒的な作画量で1万点以上の作品を世に残した。広重、国芳らと並び、江戸末期の浮世絵界を牽引した。

歌川国芳(1797-1861)

寛政9年(1797)11月、江戸の日本橋本銀町で染色業を営む柳谷吉右衛門の元に生まれる。15歳の頃、歌川豊国に入門する。当初は売れない時期があったが、31歳の頃に発表した中国の小説を題材にした浮世絵シリーズ『通俗水滸伝豪傑百八人之一箇』(つうそくすいこ だんごうけつ ひゃくはちにん の ひとり)をきっかけに人気を博し、「武者絵の国芳」として知られるようになる。以来、大胆で奇抜な武者絵や妖怪絵を多く手掛け、また西洋画の手法なども探求し、独自の浮世絵を確立させる。また、落合芳幾や月岡芳年、歌川芳虎など多くのすぐれた弟子を育てた。

歌川広重(1797-1858)

寛政9年(1797)、江戸八代洲河岸の定火消同心である安藤家に生まれる。13歳にして両親を亡くし、15歳の頃歌川豊広に入門する。そのわずか1年後には、歌川広重を名乗ることが許される。当初は、役者絵や美人画を多く描いていたが、37歳の頃、東海道の風景を描いた「東海道五拾三次之内」(保永堂版)が大ヒットし、名所絵の先駆者として、数多くの名所を描いた。

東海道五十三対の魅力

歌川派の人気絵師、歌川国貞・歌川国芳・歌川広重によって描かれた「東海道五十三対」。本展では、全五十五枚の「東海道五十三対」と関連作品を併せて、八十点以上の作品を展示しています。彼らはそれぞれ異なる得意分野で江戸の人々を魅了しました。嘉永六年(一八五三)に刊行された『江戸寿那古細撰』(きき)では、「豊国にかほ(似顔)、国芳むしや(武者絵)、広重めいしよ(名所絵)」と記されています。「東海道五十三対」では、それぞれの絵師の表現描写に注目しながら、古くから伝わる東海道の伝説・故事・名物を楽しむことができます。

東海道名所図会と東海道五十三対



【図1】秋里籬島著 竹原春泉斎画『東海道名所図会』巻之三「遠州 浜松」より抜粋

【図2】歌川国芳「東海道五十三対 浜松の駅」

「東海道五十三対」の各図や詞書の多くは、『東海道名所図会』が参考にされています。『東海道名所図会』は、寛政九年（一七九七）に刊行された東海道の旧跡や神社仏閣、宿場の様子などが描かれた名所案内記です。本文は秋里籬島、挿図は竹原春泉斎、鋳形蕙斎、円山応挙などが担当しています。

【図1】は「東海道名所図会」の浜松の箇所です。一の谷の合戦で敗れた平重衡が捕虜として鎌倉へ護送された時のこと。途中に寄った池田宿で、熊野という女性に琴歌で慰められる『平家物語』の「重衡東下り」の場面が描かれています。【図2】の歌川国芳による「東海道五十三対 浜松の駅」では、【図1】の詞書が引用されているのみならず、図像も参照されていることがわかります。例えば【図1】の左頁の中央に描かれている直垂ひたれを着た男性に注目すると、この男性の服装や佇まいが、【図2】に描かれている平重衡の姿と重なっていることに気づかされます。一方で、熊野の姿は平安時代の風俗で描かれている【図1】とは異なり、【図2】では、島田髻という当時若い女性の間で流行した髪型などを取り入れ、浮世絵ならではの表現で描かれています。二つの図を見比べることで、それぞれの作品の特徴を知ることができます。

東海道五十三対の版元



団扇重ね：遠州屋又兵衛



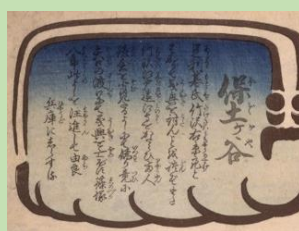
団扇：伊場屋仙三郎



雪輪重ね：小嶋屋重兵衛



団扇2：伊場屋九兵衛



海老：海老屋林之助



長方形：伊勢屋市兵衛

「東海道五十三対」は「小倉擬百人一首」を出版したことも知られる伊場屋仙三郎、伊場屋九兵衛、伊勢屋市兵衛、遠州屋又兵衛、小嶋屋重兵衛、海老屋林之介の六軒の版元から出版されています。彼らは元々、団扇絵(団扇に貼る浮世絵)の版元として活動していましたが、天保十二・十四年(一八四一・四三)頃を中心に行われた天保の改革によって、地本問屋仲間が解体されたことにより活躍の場を広げ、錦絵の出版にも関わるようになりました。「東海道五十三対」では、画面上部に描かれた団扇型の枠によって、それぞれの版元を区別しています。

【知ればもつとおもしろい 浮世絵用語辞典】

東海道五十三対：東海道の各宿場にまつわる伝説や故事・名物を描いた

揃物。歌川国貞・国芳・広重の競作により制作され、出

版には六軒の版元が携わった。

似顔：肖像画の一種で、役者など個人の顔つきを似せて描いた絵を指す。

名所絵：名所や景勝地を描いた絵を指す。文化・文政期の旅の流行を経て、

大流行する。

武者絵：歴史や軍記物、伝説上に登場する武将や英雄を描いた絵。浮世絵

の誕生当初から人気のジャンルであった。

揃物：一つのテーマで構成されたシリーズ物の浮世絵。特に天保期には、葛

飾北斎の「富嶽三十六景」や広重の「東海道五拾三次之内」など枚

数の多い揃物のヒット作が次々と誕生した。

版元：浮世絵の制作・企画・販売を行う現代でいう出版社を指す。版元は、

絵師・摺師・彫師を手配する。

改印：浮世絵の刊行時期を示す印。寛政二年(一七九〇)頃に改印制度が

設けられると、検閲を通過し公刊が認められた浮世絵に改印が押されるようになった。